

冬の猿 ~崇高なる女性, 猿としての男~

藤井 聡

「冬の猿」なるフランス映画の DVD を手元に取り寄せてから一年以上経っていた。この映画については、本誌顧問、西部邁発言者塾塾長よりはじめて伺って以来、取り寄せながらも長らく観ることができずにいたのだが、この度ようやく観る機会を得ることができた。聞くところによると、この映画はどうやら、女性、というよりは、女房という存在が男どもにとっていかなる存在なのかを、あるいは、より正確に言うならば、いかに「うんざり」するような存在であるのかを、何とも言えぬ形で描いた映画であるらしい。私事で誠に恐縮ではあるが、筆者も女房と呼ぶべき存在を持ち十数年となるのだが、「冬の猿」の話を伺って以来、一度、一緒に観てみたいという思いを拭えずにいた。だが、そういう好機をうかがっている内に、一年以上の時間がたってしまったのであった。

この映画は、フランスのある港町、ノルマンディのホテルを営むジャン・ギャバン演ずるある一人の男が、第二次大戦中にドイツに空襲を受ける日から始まる。ジャン・ギャバンは町中で有名な酔っばらい。彼は若い頃に中国に行ったことがあり、酔っばらえばいつも、中国での出来事を話す。かくいうこの日も、いつもの飲み屋で中国の事を語りながら酔っばらっていた。空襲が始まってほどなくするとジャン・ギャバンは、「こりゃ女房が心配しているだろう」ということで、家路につく。道中激しい空襲にさらされながらもジャン・ギャバンは始終ご機嫌で、空襲など意に介さず千鳥足で家に向かう。ほどなくして家につくと、ジャン・ギャバンの妻（これが何とも美しい女性なのだ）が、空襲に怯えて震えている。ジャン・ギャバンは、こんなのどうってことないさ、と妻に言う。無論、その言葉が妻に通じるはずもない。そんな会話を続けているうちに、空襲はますます激しくなる。そしてついに、直撃弾が家を襲う。激しい爆音。家の照明は全て消え、闇が訪れる。暗闇の中に女のすすり泣く声だけが小さく響く。画面の右端に明かりがともる。ろうそくを点けたジャン・ギャバンは、その明かりの中からすすり泣く声に歩み寄る。彼は言う。「今から、大事な事を言う」。そして、なみなみと酒が注がれたグラスを片手に持ちながら、「もし、この空襲を生き残ったなら、俺は、もう二度と酒は飲まない。誓う、これが最後の一杯だ」、こういって、その酒をゆっくりと、じっくりと、飲み干す――。

シーンはかわり、15年後。ジャン・ギャバンはもはや酒を一滴も飲まない男となっていた。彼の唯一の楽しみはアメであり、何かにつけてアメをしゃぶる。ホテルはかつてのまま、細々と経営されている。そんなホテルに、一人の若い男がやってくる。この男こそ、ジャン・ポール・ベルモンド。彼は、ホテルに着くなり酒を探し求める。しかし、ホテルにはない。ほどなくして近所の酒場に赴く。そこでこのジャン・ポール・ベルモンドは、浴びるように酒を飲み、酔いつぶれる。それをジャン・ギャバンが迎えに行く。そして部屋に連れて行く道すがら、この若い男が昔スペインに旅をしたことがあることを知る。ジャン・ギャバンは、そのスペインの旅と自らの中国への旅を重ね合わせつつ、酔いつぶれたその若い男の姿に、昔の自分の姿を見いだすのであった。そして、彼は酔いつぶれたジャン・ポール・ベルモンドに、俺たちは冬の猿の様にはぐれた奴らなんだ、とつぶやく。猿は冬が訪れる前に、えさを求めて群れからはぐれるのだそうさ。冬の猿、とは、はぐれものことなのだ。

この日以来、ジャン・ギャバンは、この若い男に、何とも言えぬ思いを深めていく。妻はこの「危機」を察する。このまま行けば、きっと、ジャン・ギャバンは再び酔っばらいに後戻りするだろう、その「女の予感」は、やはり正しかった。ある夜、ついにジャン・ギャバンは、その若い男と飲みに行くことを、

何とも当たり前のように決める。その時、彼の妻は、当然のようにとめようとする。ここで、妻への誓い故に、15年間酒を控え続けたジャン・ギャバンは言うのだ。「俺はおまえを愛している。もう一度生まれ変わっても、おまえと一緒にいるだろう」。こう笑みを浮かべつつ述べた後、ぐっと表情をかえてものすごい形相でこう言うのだ。「でもおまえはうるさい、おまえにはもう、うんざりだ！」こう言っただけ、ジャン・ギャバンは街にでてジャン・ポール・ベルモンドと共に、派手に酔っぱらうのだった。

——観客は、あるいは、この映画を観る男どもは、このジャン・ギャバンの最後の酔っぱらいっぷりに、そして、その直前に妻に吐いた「おまえにはもう、うんざりだ！」の一言に、大いに溜飲を下げるのだ。この酔っぱらい二人は、酒場にたむろする男どもにケンカをうり、町中の花火を買いあさって派手に打ち上げる。こんなに楽しい夜はない、としか言いようのない夜。かくいう筆者も、映画が始まる前から飲み続け、ビールを飲み、ワインをあけ、そして、日本酒をあおり、この酔っぱらいのシーンでは相当いい気分になっていた。あまりにいい気分で、白黒の画面の中で打ち上げられる美しい花火を観ながら、ついついすっかり眠りに落ちてしまった(したがって実を言うと、恥ずかしながら筆者はまだ、最後までこの映画を観ていない)。

ただし、どうやら、女性は、筆者の様に溜飲を下げる様な心持ちにはなっていないようなのである。

これは妻から聞いた話を踏まえて憶測で語るのだから、大きく違っていたら女性の皆様に申し訳ないのだが、まずもって、ジャン・ギャバンがどんな気持ちで、どんな思いであの夜、酒を飲まないことを誓ったのかが、正確には分からないようなのである。そして、何より、「冬の猿」が何をしているのか、それに一体どういう意味があるのかを理解できないようである。これらが分からなければ、15年間酒を飲まないということが一体どういうことなのかがよくわからないだろうし、自分の何がどう「うんざり」されているのかもさっぱり分からないだろう。きっと、女性にしてみれば、酒なんて飲まないのが当然で、酔っぱらわずに普通にしらふでいるのが当たり前なのである。

無論、それは正しい。かく言う筆者も、酔っぱらいは嫌いだ。

しかし、そのことと、男にとっての「冬の猿」とはまた別の話なのだ。

男は群れる。猿で言うなら、猿山の猿として、誰が上だ下だとやっている。しかしそれは無論、その猿山の群れを好んでいるのだということの意味しているのではない。それは何ともしようのないことなのであり、男であるなら誰もがこんな猿山からはぐれたいと、どこかで思い続けている。そして、ある季節が訪れた時、こう感じている男どもは自然と群れからはぐれてしまう。そして「冬の猿」となる。ただし、はぐれたとて、永遠にはぐれ続ける訳にはいかない。「冬の猿」どもは結局また戻ってくる。ただし、群れに戻った「冬の猿」は、猿山の外に何があるのか、「冬の猿」として生きる時間がどんな時間であるのかを知ってしまったている。かくして、冬の猿であった男どもは、酔っぱらうのである。酔っぱらうその時間に、かつての「冬の猿」の時間を取り戻せるような気になるのである。無論、取り戻せるはずなどないのだが——。

「冬の猿の時間」、それは、女性にとっては、永遠に未知なるものなのかもしれない。あるいは、知ってはいるが、無価値なものとしか思えぬ時間なのかもしれない。

しかしそれと同時に、男にとって女性は未知なるものなのだ。何が未知なのかと言われても答えようがない。何が未知かも分からぬぐらい、未知なのだ。だから、男は酒を止めようとも誓うのである。人によっては、タバコを止めようとも誓うこともあるだろう。それが一体、女性にとってどんな意味を持つのかということは、正確には分からないままに、である。それはさながら、女性が、「男が、冬の猿の時間に対してどのような思いをいただいているのかが分からない」、ということと同じであろう。ただ分かるのは、それがどうやらこいつにとっては大事な事らしい、という曖昧な想念だけなのである。

こういえば、なんだか男と女が対等であるかのように聞こえるかもしれないのだが、断じて、そんなことはない。そこには、圧倒的な非対称性が存在している。その非対称性とは、男は女の未知性に崇高とも言わざるを得ない様なものを感じている一方で、女の方には、どうやら、男の未知性は崇高なるものどころか、単なるやっかいなものとして映っていないようなのである。そうであるのなら、女性にとって男は、現実的には役に立つ存在ではあるかもしれないが、最も深い部分において所詮は人間以下の「猿」とでも言わざるを得ない様な代物なのかもしれない。つまり、女は男にとって宗教的な崇高なものとして立ち現れる一方で、男は女にとっては、そこらをうろつく猿のようなものなのである——。

しかしながら、ここにさらなる「やっかいさ」が潜んでいる。女は男にとって崇高なる存在であるのだが、それと同時にやはり、暗闇ですり泣くか弱い存在でもあるのだ。そして、他愛もないことで喜んだり怒ったりする、喜怒哀楽をもった人間でもあるのだ。崇高なるものが、全くもって普通の人間でもあり、しかも、守ってやらねばならぬ存在でもあるのだから、それに対する対峙の仕方の困難さたるや、極大化せらるものとならざるを得ない。

かくして、男は、「うんざり」するのである。

ジャン・ギャバンは、そうしたうんざりしている全ての男どもの代わりに、かの形相で、「おまえにはもう、うんざりだ！」と云ってのけるのである。

これで溜飲が下がらぬのなら、その人物に下げるべき溜飲などないと言って差し支えない。

ところで、筆者が酔っぱらって眠りに落ちたのは、ジャン・ギャバンとジャン・ポール・ベルモンドが酔っぱらい、海岸ででかい花火を打ち上げていた頃であった。しかし、しらふの我が家内が眠りについたのは、あろう事か、まさにジャン・ギャバンが「うんざりだ！」と叫んだまさにその刹那だったのだ。筆者にそれが分かったのは、まさにその時に、終始うつらうつらしていた我が家内が「もうねむい、寝てくるわ」と言い残してぶいと寝室に行ってしまったからだ。ジャン・ギャバンのセリフに我が精神の半分において溜飲を下げつつも、狙い澄まして言ったのではないかと思えるほどの妻のその一言に唾然とした気分が我が精神の半分以上を占めていたのは言うまでもない。

何ともうんざりとしてしまいそうになる話ではあるのだが、結婚して十数年の中途半端な猿である自分ごときうんざりする資格など持ち合わせてはいないのだろう。死ぬまでに一度でも「うんざりだ！」と云ってのける機会が我が身に訪れるのかどうか、それすら分からぬ話ではあるが、その機会のためにも、今しばらくは猿として、しばしば酒場で酒でも飲みながら、このまま、日々過ごしていくしかなかろう。おそらくは、それ以外にできそうな事など、きっと何も無いのだから。